

東北大学附属図書館蔵『あめわかみこ』の翻刻及び解題

勝 俣 隆

翻 刻

凡 例

一、この翻刻は、東北大学附属図書館狩野文庫に所属される中世小説『あめわかみこ』（書写年不明の写本一冊）の全丁を、原本に基づいてできる限り忠実に翻刻したものである。

二、翻刻にあたっては、次の方針に拠った。

- (1) 漢字、仮名の区別をはじめ、仮名遣、宛字、振仮名等は、すべて原本通りに活字化した。
- (2) 従って漢字の字体は、原本における使用例に従って、旧字体、あるいは略字体を使用した。
- (3) 誤字、脱字などは、原本のまま記し、特に問題のある場合のみ、その右側に、括弧を付して、細字で注記を加えた。
- (4) 見せ消ち等による訂正は、下に書かれた文字を本文に採り、その右側に「×」記号をつけ、訂正の文字を、括弧で囲み細字で記した。
- (5) 補入は、補入記号（○）のある場合もない場合も、できる限り、原本の体裁のまま翻刻し、「ホ」と仮名を振って注記した。

- (6) 傍点のある場合は、原則として同じ体裁で表記した。勘物については、本文中の該当部分の右側に、「＊」印をつけ、括弧で囲み細字で記した。なお、傍点、勘物とも朱で記されている。

- (7) 本文には、句読点は施したが、濁音表記は付さなかった。
- (8) 会話文、独白文、心中表現とも、原則として、「」、及び『』をつけて示した。

- (9) 「く」「ゝ」「ゝ」等の踊字の符号は原本通りのものを用いた。

- (10) 歌は地の文より二字下げて書き出し、上句・下句の頭を揃えて二行書きにした。これは原本と同じ書式である。

- (11) 丁数は、原本の本文が開始する丁を第一丁とし、原本の丁の表、裏が終わるごとに、「記号を付し、その右側に、丁数を示す漢数字と、オ（表）、ウ（裏）の略号とを記した。

あめわかみこ 全

（い、たいらのきょうのたちはしめ）
むかし大この京のたちはしめは、さかの天皇の御時、三条たかくらに、内大臣ときこえし人おはしけり。いみしき人にてそわたらせ給ひける。きんたち五人おはします。ちやくしはとうの中將、

二はんは四位の少將、三はんは三位の中將とそ申ける。そのつきは姫君にてそおはします。いつれもみめかたちすぐれ給ひける。なかにも乙姫はならふ人こそなかりけり。三十二さうをこえ、八十二さうの御よそほひ、あたりもかゝやくはかりなり。しかれば、ちゝはゝいつきかしつき給ひて、きさきのくらゐに奉らんとそ

おほしめしける。御かともきさきにまいらすへきよしせんしなる。その外、天上^{（天）}にかたをならふる人ゝ、「我もく。」と、心をつくさぬ人はなし。かくて月日も過行は、あね御せんは十七八^{（七八）}もうと姫君は十五と申八月十五夜の月くまなくてらし、雲のうへもすみわたりて、やうくわかぬひかりに、姫君御心をすまし、にしのたいにたち出て、みすをまきあけ、きんをしはしらへて、時のてうしにあわせて、しうふうらくをそあそはしける。人いまたねしつすらて、「いかなれば、何事につけても、かやうの人にすぐれ給ふ」^{（一ウ）}

らん。」と、しるもしらぬもをしなへて、すいきのなみたせきあへす。ちゝはゝきこしめし、「いかにや。夜ふくるに見きく人もこそ侍れ。いそき入せ給へ。」とて、あんせちの大なこんとのを御つかひにて、「とくく。」と仰られけれども、きよしん所へいらせ給ふ。さらくまところみ給はて、御ころをすまし給ふに、夢うつゝともなく、きちやうのうちさゝめきて、れいならぬ匂ひうちこんして、御年の程はたちはかりなる天上人、玉のかふりうつくしくめして、あてやかにおはしますか、かたはらによりふし給ふもしり給はて、ひめ君は月のなこり御身にしてみておはしければ、かの天上人、ひめ」^{（二オ）}

君の御袖をひき、

くまもなき月のなこりにさそはれて
心はそらになりにけるかな

とうちなかめ、よりふし給へは、ひめ君おとろき給ひて、「これもむかしのちきりありてこそ、これまで参り侍れ。」と、やうやうくこしらへ給へとも、とかくの御いらへもしたまはす。夢人うらめしけにて、「此世ならぬ御ちきりにて侍るに、なとや、かくまで御心つよくおはしますそ。」とて、

いにしへのちきりもふかし此世にて
ふたたびきみにめぐりあひぬる」^{（二ウ）}

とうちなかめ給へは、ひめ君きゝ入給ふ御心ちして、御いきのしたにて、

いにしへのちきりはしらし此世にて
かゝるうきめのうちゑしらしな

とうちすさみ給へは、夢人やうくこしらへなくさむるとおほしめしければ、夜も明ぬ。御あたりを御覽しければ、人もなし。「夢なりけり。」と、うれしくおほしめしける。うつりかさなからうつりて、さうなくうせさりければ、その日もやうく暮、又、うちまところみ給へは、又、かの人おはします。今は夜もへたてすかよひ」^{（三オ）}

給ふ。うつゝにも見え、おもかけにもたちそひ給へる。此夢人のたまふやう、「我にむかしより、ちきりありてむまれ給ふ。されは、わか身は、此世のすまいありかたき身なれとも、あまりにきんの音おもしろく侍りて、聞すてかたくて参りより、露ほとも、たちさるへしともおほえす。我まいりかよひ候はん程は、いかに御かとの文と申とも、とりあけ御覽すへからす。まして、返事^{（返事）}の事は申におよはず。」と、いましめ給ひけり。かくてたかひに、あ

さからぬ御ちきり、いろいろならぬ御ことにてや侍りけん、夢のうちとはおほせとも、御身たゝならすおはし」^{三ツ}

ます。いよくたくひなくおほしめし、御そはをたちさき給ふ事なく、すてにそのとしも暮、あくる三月の比、春の日のなかに、御つれくゝに、御かとおほしめすやう、「いかなれば、内大臣はいまゝて姫をまいらせぬやらん。」と、おほしめして、「おとろかし給はん。」とて、藤かさねのうすやうに、

人しれすいまやくとあふさかの

こゝろのまつにかゝるふしなみ

かやうにあそはして、藤の枝につけて、頭中將をめして、「これいもうとの乙姫にたひて、返事とりてまいれ。」と、せんしなる。中將これをたまはりて、ちゝの^{四オ}

内大臣の御かたへまいり、くるまよりおりて、此よし申ければ、はゝうへ、西のたいへいらせ給ひて、此よしのたまへは、ひめきみおほしめすやう、「夢人のいましめ給ひつる物を。」と、心うおほしめして、打ふし給へは、はゝうへ御らんして、「あなあさまし。一天下のあるしにておはしますこくわうの文を、かやうにとりあげ給ふなどは、たれやの人の申そや。」とて、文をよみて、きかせたてまつりて、いろくゝのうすやうとりそへて、御すゝりひきよせ、筆をそめて、ふしたまへる御手にもたせたてまつり、「とくく。」との給へは、心うき^{四ウ}

事におほしめし、御なみたにむせ給ひて、筆にまかせて、うはのそらにあそはして、うちおき給ふ。

かすならぬ身にはおもひのふしの花^{マエ}

まつふくうらにかひやなからん

とあるを、はゝうへとりて、中將殿にたてまつり給ふ。やかて此

よしそうもん申させ給へは、御かと此文ゑいらんありて、「うつくしや。筆のたてと、すみのなかれ、もしのならひ、たくひあらし^{マエ}。」そのかたちもあらはれて、いと御心いそかれさせ給ひて、「卯月十三日、内大臣のおとゝ、ひめ君きさきまうてあるへし。」と、せんしなり。^{五オ}

大臣殿は大きによるこひ給ひて、「よの人は、すゝめたてまつりてこそ、きさきにたてまつり給ふに、これはかたしけなくも、御かとよりせんしをかうふりてまいらすこと、めんぼくこれにすきす。」と、よろこひ給ふ事かきりなし。ひめ君は、「さても、夢人の、さしもいましめ給ひし物を。」と、御むねのうちさわきて、「さるにても、我身すこしきる事あらはこそ。」と、おほしめしてまち給へは、すてにさよふくるまで、みえ給はす。あさましく覺しめして御覽すれば、やうく夜あけかたにおはします。れいのやうにもなれくしくはし給はて、きちやうの^{五ウ}

そとに、玉の笛をあそはし、うらみたる御けしきなり。やゝしはしありて、御なみたをなかし、の給ふやう、「さしも申つるかいもなく、みかとの文御らんして、返事申させたまへは、御身はかれ給ふ。我は、あさからすおもひたてまつれとも、こよひをかきりとおほしめすへし。御ちきりはふかき身にて侍れとも、君は又都にもちきりありて、此世の人とむまれ給へり。されは、我は此世の物にてはあるましき御ちきりにて侍れとも、きんの音あまりにおもしろく侍りて、あくかれ出て、何となくちかつきたてまつり、たくひなき御ちきりに^{六オ}

心をまよわし侍るそや。さるにても、わすれかたみをとめぬる事こそ、かへすくくやくしく侍れ。過にし秋の比より、夜かれなくかよひたてまつり侍れは、『いかなる物ぞ。』とおほしめす覧。我

はこれ天のかみ雨わか御子とは我事なり。君はてんにんにておはします。されとも、とうくうに御ちきりふかきによりて、みめかたちすくれて、此世の人にむまれ給へり。返く、此かたみとゝめ侍るこそ心うけれ。さりながら、此もの三さいと申さん時、今一度よそなからまいり、けんさん申へし。此かたみゆへ、御身も心くるしくしはおはしさんことの、いとおしさよ。さりながら

「六ッ

末はめてたくおはしますへし。我身もめにこそ見えたてまつらすとも、心は君のかげ身にそひたてまつるへし。さるにても、此世にはおもひよらぬちきりして、かたみをのこし侍るこそふしきなれ。此かたみをゆかりの草とおほしめし候へ。」とて、

わするなよしのふの草のつゆけくと

見はてぬ夢のかたみともみよ

とて、御くしかきなて、「くれく申侍りつるに、つらき御心こそ、たくひなくおほえ侍れ。」と、かへすくうらみ給ひて、御なをしのそてを御かほにおしあて、「さめくとなき

「七ッ

給へは、姫君もせんかたなくおほしめして、御なをしのそてにとりつき、御なみたもせきあへさせ給はて、

なにしにかわすれかたみをのこす覽

いとゝしのふのつゆのしけきに

「うらめしの御ことや。おもふこともなかりし物を、御かとの返事心ならすの事にて侍しそかし。我身はいかゝなり侍らん。」とかなしみて、

これやこのかきりなるらんむは玉の

よるくかよふ夢のかよひち

とて、たかひに御そてをひきちかへ、御なみたにふし

「七ッ

しつみ給ふ程に、夜も明ぬ。御あたりを見まはし給へは、人もなし。御うつりかは、さなからのこりて、御枕は、なみたにうくはかりなり。何となくさきくよりも心ほそく、物かなしくおほしめして、御きぬひきかつきふし給ふ。されとも、うつゝにてもあらはこそ、たのもしくおほしめして待給へとも、とこもむなしくみへ給はす。くるよも、又くる夜も見え給はす。いまはかけろふのそのおもかけたへはて、有しうつりかはかり、御身にしてみて、夢のかよひちたえはて、「そのおもかけも見えたまはす。今はかひなき

「八ッ

露のいのちなからへても何かせん。」と、あくかれ給ふ。御心のうちせんかたなき御ありさま、しるへなければ、「いかに。」と申人もなし。御まへの女はうたちは、「たゝよのつねの御こゝろなやみにこそ。」と、とりくく申侍れとも、とかうの御いらへもし給はす、おほしめし、しつませ給ふ。

夢にたに見えこぬ人のうつりかの

何とてふかく身にはしむらん

いまは、はやおきさせ給ふ事もなし。すてに卯月十日比に成ぬれは、御かとよりは、有し文のゝち、たひく文ありしかとも、うき事おほしめしければ、中く

「八ッ

御返事もなかりけり。みかとは、「なとや其後は御返事もなきやらん。」と、心もとなくおほしめして、卯月十日に、うのはなかさねのうすやうに、

かたらはんことをはいそく時鳥

をもはぬかたにしひねやなく

とあそはして、「此たひは返事とりてまいれ。」と、せんしありければ、中く御めをたにもふれ給はす。すてに卯月十三日になり

ぬれは、ちゝ大臣殿は、きさき御いてたちに心をつくし給ふ。女はうたち、衣のそてくちをかさね、こしゝくるま、こんくになり

―^{九オ}

みかきたて、その日になりぬれは、姫君をは大臣殿へ、うつしたてまつらせ給ふ。さながら御こゝろも、心ならぬ御身なれば、なき人のやうにそおはしましける。「なとや、かやうにうつもれ給ふそや。」とて、色くになくさめたてまつらせ給ふ。さて、御ゆとのへ入たてまつる。姫君、「心うや、夢人のおはしまさは、かゝるうき事はあらし。」と、おほしめし、いづよりもこひしく、御むねうちさはき給へは、ゆとのうちにて、たえ入給ひぬ。御かいしやくの女房たち、さはきあはて、はうへにかくと申侍れば、御めのと、はゝ北のかた、「此程、物も御まいりなく、

―^{九ウ}

やみ給ひて、御こゝろまとひ給ふらん。」とて、きちやうのうちへ入たてまつり、北の御かた、いそきとりつき給ひて、「いかにせん。」と、かなしみ給ふ。おとゝも、あまりのかなしさに、きちやうのかけにたゝせ給ひて、かなしみ給ふことかきりなし。ひめ君は、御心もなく、御むねあきて、すゝしの御きぬにすきたるをひきあはせんとて、御覽すれば、雪の御はたへくまもなくうつくしくて、御ちのさきくろくと、たゝならぬ御すかたに見え給ふ。はゝうへは、おとろき給ひて、「いかにや」。たれやの人のまいりかよひしそや。あな心うや。あさましや。

―^{十オ}

御そはにさふらひし人ゝは、しりたてまつらぬことはあらし。いかなるひとのまいりしそや。うらめしや。」とて、なきかなしみ給へとも、夢のうちの事なれば、一人もしり侍る人はなし。御かいしやくの女はうたちは、「あな心うや。いかなる人のいらせ給ひけん。おほろけにもしり侍らす。」とて、さゝやきかなしみ給ふはか

りなり。あまりの心うきに、「いかにや」。ひめきみ。たれ人のまいり侍りしそ。たしかに仰られ候へ。うらめしの事や。」とて、なけき給へは、ひめ君、御心におほしめすやう、「はゝうへにかくし奉るへき事ならず。」とて、御いきの

―^{十ウ}

したより、ありのまゝに申させ給へは、ちゝ大臣も、比よしきこしめし、御なをしの袖を御かほにあてゝ、さめくとなき給ひ、「心うきことかな。たゝ人のもつましき物は女子なり。むまれ出しより、たくひなくもてなしかしつきたるかひもなく、かゝるうき事を聞物かな。さても、いかゝせん。」とて、ふしまろひ、なけき給ふより外の事そなき。「もとより、しきくならは、あねひめをこそまいらすへけれども、御かたちおとり給へは、御かとの御覺もいかならん。」と、おほしめしけれども、「今のはちをかくさはや。」と、覺しめし、俄に

―^{十一オ}

あねこせんを入たてまつりて、さまくくに、御出たちをぞ、し給ひけり。此暮の事なれば、とかくまきはしたてまつり、乙姫君とかしつき奉りて、此程、心をつくし侍る女はう、みるくあね君へそまいり給ふ。此程は、ゑにかきたるやうなる人にそひ奉て、たゝ今俄にひきかへられ侍る事を、みなく忍ひくになきかなしみあひ給ふ。大臣殿は、あねひめ君を御らんして、「いもうとにおとり給御かたち、御かとの御おほえもいかゝあるへき。」と、いよく御むねふさかり給ひて、なくく我御かたにかへり給ひて、姫君の御かたへ御つかいをたて、「さやうに、ゆひかひなき

―^{十一ウ}

ふるまひし給へる人は、ひとつうちにもかふからず。はやく御所のうちを出給へ。」と、たひくつかいありしなは、はゝうへ、きこしめて、「あな心うや。かほとめてたき御かたちを、いつ

かたへ出し奉るへき。我身にあまるとかありとも、いかて出し侍るへき。心うや。」とて、なきかなしみ、もたへこかれ給へとも、御つかひ、きひしくたち侍れば、ちかくおよはす。ひめきみは、きえもはてぬ御身に此よしを聞給ひ、御いきの下に、「露霜ならば、きえもうせなん物を、さすかに心にまかせぬうき身なれば、さからなし。身つからゆへに、さのみうき」^{十二オ}

事をなかせ給はんよりも、とく／＼いつかたへもいたし給へ。」とて、御なみたをなかし給へは、母うへきこしめし、「御めのとたにいきて侍らは、かほとに物をはおもはし物を。行ゑもなき、わかき物ともに、あつけ奉てはいか／＼せん。」と、かなしみ給へとも、ちからなくいたし給ふ。は／＼うへ、なく／＼の給ふやう、「いかにや、みつからを、さこそつらしとおほすらん。わらはもつれて出侍るへけれども、こよひは、あね君うちまいりに、あはすはち／＼おと／＼のはらたち給はんこともかなしく侍りて、我身はこ／＼ならす、と／＼まり侍るそや。心は御身にこそそひまいら」^{十二ウ}

せん。」とて、御くるまにいそきのせたまてまつり、御なみたせきあへす。姫君は、「心うき我身のありさまにて侍れば、ち／＼の仰も御ことはりにて侍る。いかなるふち・川にも身をしづめはや。」と仰たれければ、「あなかしこ。さやうにおもひ給ふへからす。女はうたち、へんしも、めはなし給ふな。いかならん御色もあらん時は、こ／＼え給ふへし、御めのとこは、こさいしやうとて、おと／＼ひあり。としは十七と十九とにそ、なられる。ほんのめのとは、過にし春、きやうにうせられけり。これさへ姫君の御ふうん。」^{十三オ}

と、いまさらこひしくおほしめす事、かきりなし。今^{十三オ}のわかき御めのとこ、その外、五六人そつけたてまつらせ給ふやかて、内大臣のあね御せん、伊よのかみにおくれて、あまにな

りて、一条におはします所へ、御車よりおはしたてまつり給ふ。おはこせん、「あないとをし、いかなる御ことそや。」とて、御いとをしみかきりなし。ひめ君は、一条におはしまして後は、おき出給ふこともなし。うちふしてわたらせ給へは、御かいしやくの女房たち、なけきかなしみ給ふばかりなり。さるほとに、ち／＼大臣殿には、やう／＼日暮、夜ふくるま／＼に、ちんにくるまやり入て、きさきいてさせ給ふ。その御ありさま」^{十三ウ}

いもうとの姫君ほとにはおはしまさねとも、なへてならぬ御すかたにてそはします。かす／＼の女はうたち、いつきかしつき奉、御かいしやくし給ふ御ありさま、まことにふしきなり。御さひわひにてましますは、「御かとも、おろかにはおほしめさし。」とおほしける。すてに、御くるま、ちかつきたてまつる。御かとは、ことに御心をつくし給ふ人なれば、うれしくおほしめして、御車よりおりさせ給ふもおほつかなくおほしめし、とうたいのかけより、まつ此御ありさまともに御覽すれば、十二人の女はうたち、八人の御かいしやく、きぬのつま」^{十四オ}

あさやかにうつくしさかきりなし。さるにつけても、「姫きみさそあるらん。」と、いよ／＼御心もたへさせ給ひて、ゆかしくおほし、きちやうのはつれより、のそき給へは、御たけのほとすこしたかく、御くしは御たけに二しやくはかりあまりて、すこし御くしのか／＼りあららかに、かねておほしめしつるにたかひたる心ちして、「ふしきや。されは日比聞し人なるにや。それかあらぬか。」と、ふしきにおほしめして、なをいそき御けんさんありて、それともおほしめしなをす御こともなし。明もはてぬに御かへりありて、やかて、とうの中将をめして、」^{十四ウ}

「ふしきや。何とて聞しにたかひ侍らん。みめかたちこそ聞しに

たかふとも、藤の時の返事あまりにうつくしさに、いまた我身をはなさすもち侍れは、手をとりにて御らんせん。」とて、文をあそはしてたひにけり。中将殿は、せきめんして、しよきやうてんへそ、たてまつり給ふ。「返事よきやうに。」と、御かいしやくの女はうの給ふ。

あひみてはうれしかるへきけさなれと

くれまつほとそくるしかりけり

とあるを御覽して、やかて御返事に

なにかそのくれまつ程をなけくへき

明たにはてゝかへるこゝろに

とあそはしてかへし給ふ。御かと、此よしゑいらん有て、「あらふしき。これもわろきにてはなけれども、藤の時の返事にすこしもにたる所なし。あらふしきや。まるかあまりにせつにおもふをにくみて、おと姫をとうくうにたてけるやらん。さるにても、あまりにふしきにおほゆる。ゆきてみなをすこともや。」と覚しめしで、やかて天上人十人はかりめしくして、しよきやうてんへきやうかうなりて、御らんし入させ給へは、

卅人はかりなみい給へる女はうたち、おとゝの心をつくし給へる人ゝなれは、「たゝ天人のあまくたり給ふか。」と、この女はうた

ちには、御心のとまる人ゝおほかりけり。「ふしきや。おやの心はやみにあらねとも子をおもふ道にまかふ物かな。これ程めてたからんむすめに、女はうたちをえりすくりてつけたることのほいなさよ。あら、うつくしの人ゝや。此女はうたちの中には、御心のうつる人ゝおほかりければ、やかて御いろにいてにけり。いかてか、『あけたにはてゝ』とかこたせ給ふおそろしさに、まいりてあけさせ侍る。」とて、もたせたまへる

御しやくにて、きちやうをうちあけさせ給ひて、御覽し入させ給へは、「ちゝはゝにかしつかれ侍るか。」とおほしくて、しろくきよけに、ものゝしくはみゆれとも、やさしくけたかきふせいはまします。御らんしなをす御こゝちもまします。『この年月、心をつくし侍りけんことのくやしきよ。』と、御くわうくわいかきりなし。「くれなはまいり侍らん。」とて、御かへり有て後、又ともいらせ給はす。文のたよりもかきたえさせ給ふ。御かいしやくの女はうたち、その外の人ゝまでも、「乙姫にてましますは、

いかてか、かく御つれゝましますへき。」と、さゝやきたまふも

ことはりこそきこえし。一条の姫君、此よしきこしめし、「あな心うや。かしこうそまいりさりける我も、さこそあらんすれ。」

何事につけても、夢人の戀しさに、御なみたにしつませたまふ。

さる程に、ちゝの大臣殿は、きさきの御事をおほしめして、「心うや、たゝ人のもつましき物は女子なり。都のうちにて、たれやの

人はかたをならふへきに、よしなき姫ゆへ、うきなをなかし侍る

事のくちおしきよ。これにつけても、一条の姫にて

ましますは、いかなる御かとゝ申とも、いかてかめてさせたまは

さるへき。もとよりあねは、おやのめにさへ、あらまほしき所も

なし。まして御かとの御めにいらぬもことはりなり。御かとのお

はしまさゝる人を、ひさしくおきたてまつるへきことならず。女

はうたちの心もいたはしく侍に、さらは、おろしたてまつるへし。」

とて、「はゝ御せんのかせの御こゝち。」とて、御車を御むかいに

たてまつらせたまふ。そのゝち、めさぬは、まいり給はす。さる

程に、一条のひめ君は、夢人の御うつりか御身にしみて、さらく

うする

御事もなし。いよく日にまして、戀しくおほしめすはかりなり。すてに、そのとしもとかく過行まゝに、秋もなかはなりぬれは、八月ちうしゆんの事なるに、十五夜の月さやかにてらして、はしちかくいさりいて給ひて、「こそこのよひ、うかりし夢の見えそめて、いまゝてなからへ侍る事の心うさよ。」とおほしめしいて、しゆうのことかきならし給ひて、「こそこのよひ、西のたいにて、しうふうらくをひき侍し時、見そめたりし夢そかし。うきかなや。よしなきいのちはなからへて、月日はめぐりきたれとも、」^{十八オ}

みなしゆめのかけもなし。」と、いつよりも御心ほそくおほしめしつけて、御なみたせきあへさせ給はず。やかて、ひき給ふ御ことのうへに、きえ入給ふ。人々おとろきて、きちやうのうちへ、いたき入たてまつりて、夜もすから、なけきかなしみあかし給ふ。されとも、またたえはて給ふほと御事もなく、たえゝとなり給へは、御めのとも、いまたわかき人々なれは、何のあやめもなく、さしあつまりて、なけきかなしみ給ふばかりなり。御めのとの女はうたち、御みゝにくちをあてゝ、申給ふやう、「いかに、御いのちもあや」^{十八ウ}

うく見えさせ給ふ。何事をおほしめすらん。仰をかせ給へ。」と、なくゝ申せは、御いきのしたよりの給ふやう、「はゝうへの給ひしは、『あひかまいて、いのちをまたふして、ちゝのふきやうをゆりよ。』との給ひし。御ことのわすれ侍らねは、『いま一たび』とをもふなり。」と仰られければ、「御かんたうふかき御身にてましませ共、をんあひの事なれは、いそき三条殿へ此よし申せ。」とて、いそきつけ奉る。此よしはゝうへきこしめし、大きにおとろき給ひて、大臣殿への給ふやう、「いかにや、きこしめせ。『一条の姫こそ、たゝ今をかきり。』と申侍る。」^{十九オ}

『身つからを今一め見はや。』と申。いまをさいこの事なれは、『今一たび見えて、よみち心やすくさせ、しての山、三つの川をこさせはや。』と思ひ侍るそや。ふきやうをゆるさて、ころし侍る物ならは、つみのふかさをいかゝせん。』と、^{十九マ}「いかやうのせんこんをさせ給ふとおほしめしてゆるす。」とはかり、仰有候へは、「ひめにきかせて、よみち心やすくころし侍るへし。みつからにもへんしのいとまをたひ候へ。一め見てよみち心やすくころさん。」と仰有て、御こゑもおししますなき給へは、大臣殿きこしめして、ふしまろひ、御なを^{十九マ}しの袖を御かほにをしあてゝ、^{十九ウ}

御なみたに、しはしはむせひ給ひて、やゝありての給ふやう、「いかにや、きこしめせ。五人の子ともの中にも、とりわけてふひんとおもひたてまつる此ひめかためならは、ひんのかみを一すしつゝぬくとも、いなんましくこそおもひ侍りつれとも、たゝよの人のおもわくのはつかしさに、心ならぬかんたうとは申せしなり。此程もへんしのまも、わするゝことは侍らす。『いまをかきり。』と、うけ給候ひしこそ、かなしけれ。今のあひたも、いかゝおはしますらん。とくゝ入せ給へ。』との給へは、うれしきかきりなくおほしめして、こしのおしくるまの」^{二十オ}

とふをおそしといそき、一条とのへそおはします。いそき御車よりおり給ひて御らんすれば、さいしやうのつぼねのひさを枕にせさせたてまつりて、御すかたは、しほめるふせひして、ふし給ふ御ありさま、かゝやくほとにそみえ給ふ。はゝうへ、御そはにさしより、みつからこそまいりて候へ。姫君。」と、仰有て、なき給へは、きえもやり給はず、くるしけなる御いきのしたよりの給ふやう、「かいなき露の身の『きえはきえて。』とおもへとも、『はゝうへに今一たび見え奉らん。』とおもひて、いまゝてきえもやり侍

らぬそや。」との給へは、はうへきこしめし。二十一ウ

「あな、いとおしや。人々は見しり給はぬか。なとやいそきつけさせ給はぬそ。」とて、ふし給へるをかきおこしまいらせて、「はうへまいりて侍。」との給へは、こんしきちやうはつ、はのかたち、三十二さう、八十しゆかう、嶋こんしき、たう今、なつの地に、はちすのほうれんけ、はしめてひらけたるなかり、ひやつこうこんしきといふ玉を、みかきかやくはかりなる若君むまれ給ふ。その時、北の御かた、なにはのつらさもうちわすれ、いきいたきあけ奉り、「あな、うつくしや。こは、いかなる人の御子そや。これ人々御覽せよ。はう姫君も見給へ。」二十一オ

これにつけても、いよく御身あんをんにたひらかに、をはしませかし。」との給へは、ひめきみ何となく御らんしやらせ給へは、「今、ちのなかにて、なんのいろめは見えねとも、かやくはかりにうつくしくわたらせ給ふ御かほつき、雨わか御子にちかい給はぬ事のふしきさよ。」と、おほしめして、御いきのしたにそおほしめしつゝけ給ふ。

夢ならはゆめにもやまであさましや

こはいかなりしわすれかたみそ

御なみたもれ出給ふ。はうへやかて、御手つから御うふゆ二十一ウ

ひかせてたてまつらせ給ひて、「へんのつほね、ぬしはたれともしらぬ事はあらしや。ふかき人々かな。」とて、北の御かたは、やかて立歸らせ給ふ。おとこの御まへにおはしまして申給ふやう、「ふしきや。いかなる人の御子そや。よのつねのひとにてはまします。たうひかりとは、これをこそ申侍らん。はをゆるしして、御らんし候へかし。」との給へは、「むかしも今も、おやとこの、

あわれさはふかく、『御かんだう。』と仰有侍しか、さて姫は、つゝ
かなくてさふらふかや。さやうに若君むまれ二十一オ

給へるか。」とて、いそぎ御車にめして、一条殿へおはします。「大臣殿いたら給ふ。」と申せは、はつかしさいそきかたはらに忍び給ふ。「わか君こなたへ。」と仰ければ、へんのつほね、いそきまいらせて出給ふ。おとこの御らんして、「あらうつくし。されは、いかなる人の御子そや。」とて、なをしの御袖にうけとり給ひて、「いまは若君にけんさん申ほとにては、ひめ君こなたへいらせ給へ。」とありしかは、おひたされ給ひし時のうらめしき、はつかしきに、さうなふいて給はねは、此よしを御らんして、「なとや出させ給はぬそ。うちまいりの事、ちとて」二十一ウ

人めしりのうらめしきに申せしことを、ふかく御うらみこゆらん。」とて、うちなぎ給ひて、「いかにや、人々きゝ給へ。かすならぬ身さへ、子をもちては、女こきさきのくらゐをのそみ奉るに、かたしけなくも、ちきにせんしをかうふりて、たういまきさきのくらゐにつけ申さんとすれば、『たうならすおはします。』と、聞し時の心うさ、いかはかりとはおほしめす。又、あねひめをまいらせて、うきなをなかすもなにゆへそと、くちをしかりつることをもをは、いかはかりそや。されとも、まことにくしとおもひたてまつらす。人のおもわくを」二十一ウ

おもひ侍りてこそ、『かんだう。』とは申候へとも、何のあやまちもとかも、此夢君にへんしもはなれてあるやとおおほえす。」とて、御車にめさ有て、御めのと、北の御かた、はうひめ君、若君ひきくして、三条殿へそいらせ給ふ。をんあいの中ほと、あはれありかたき事はなし。さる程に、むかしの西のたいをしつらひて、すへたてまつり、いつきかしつき給ふ事かきりなし。さる程に、

神無月并日比にもなりしかは、四方の山人も、おもひのいろをあ
らはして、のきはのしのふ、にしきゝて、身にしむあらしも
――^{二十三ツ}

すさまじく、おきのうは風そよめき、ものあわれなりしかは、う
らやましくおほしめして、御ことかきならし給ひて、かくそゑひ
し給ふ。

ことの葉をさそふあらしにしらせはや
われも此世にあればつる身を

と、くちすさひ給ひて、つきせむ御なみたそ、もれいて給ふ。か
くて、若君すてに三さいにならせ給ふ。大臣殿かりそめにも、は
なちたてまつり給はす。内里へ御しゆつしの時も、つねにはくし
たてまいらせ給ふ。御かとははしめたてまつり春宮その外さらぬ
――^{二十四オ}

くきやう殿上人、いつれにかにさせ給へる。」と、御らんしくらへ
たまへとも、いつれの人にもにさせ給はす。ふしきにそおほしめ
す。御かと春宮その外のくきやう殿上人、「あなうつくしの若君
や。いかなる人の御子そや。御おやのゆかしさよ。ちゝはたれと
てはたらせ給ふぞ。はゝうへはかのいもうとひめ君にておはしま
すそや。」と、さゝやきあひ給ひて、若君をいたきわたして、あひ
させ給ふ事かきりなし。さる程に若きみ、三さいの二月より御く
しおき給ひて、七月の比は、御かたのほとにゆらくとみえさせ
給ふ。七月七日に――^{二十四}

なりぬれば、七夕のあふ日にもなりぬ。女はうたち、^{（＊梶葉書寄）}かちの葉とり
てもちて、うたなにかきて、とりくにあそひ給へは、若君、
「我にもかちのはをまいらせよ。けふこそは便宜とおほゆる。ちゝ

の御かたへ文まいらせん。」との給へは、人ゝ申されけるは、「若
君にもちゝのわたらせ給ふか。」と申せは、若君の給ふやう、「ちゝ
なくて人の子のむまるゝことやあるへし。きはめてめてたきちゝ
のましますそや。人ゝはしり給はす候や。」と仰有ければ、みなく
ふしきに覚えて、かちのはたてまつりければ、
――^{二十五オ}
「御すゝりきよめてまいらせよ。^{（＊七夕取手葉露樹墨書梶葉事）}いものは露とりて、すゝりの
水に。」との給ひて、御すゝりひきよせて、うちかたふき給ひて、
一しゆの哥をそあそはしける。

天川いかにちきれるかなれは
としに一度あふせなる覽

とあそはして、七夕のけたひくいとふたひきひかせて、ひきむす
ひてまいらせ給ふ。すなわち、かくすぎたりて、さしふくみて、
天をさしてそあかりける。女はうたち、此よし、大臣殿、北の御
かたへ申されければ、「あないとをし。みな人は、ちゝといふ人の
――^{二十五ウ}

あるそかし。若君にちゝのましまさぬと覚しめてこそ、さやう
にの給ふらん。いとoshiや。こなたへいらせ給へ。」とて、若君を
しやうし奉る。「まことに、若君。ちゝはおはしますか。」と、と
ひ給へは、「中くめてたきちゝのわたらせ給ふなり。けふはさた
めて、むかひにいらせ給ふへし。露あつめて、きやうすいしてし
やうしせん。ひころめしたるきよいをぬきかへん。」との給へは、
おとゝ此よしきこしめして、「いかやうにも若君の仰られんまゝ
に。」とて、御こそて二かさねめさせかへ、御きやうすいまいらせ
ければ、ちゝの――^{二十六オ}
御いりあらんほと、これにてあそはん。」とて、せんさいの水の山

に立出給ふ。ひつしのおはりはかりに、空より玉の御車ふりくた
りて、世けんしんとうして、御こしひかりかゝやくいきやうくん
し、ゆらめきて、御こしのうちより、「あらゝめつらしの若君や。」
と、仰有ければ、いそきはしりよらせ給ひけり。御こしのうちよ
り、まことにうつくしくほひみちたる文を。とり出し給ひて、
「これ、なんちかはゝにたてまつれ。」との給へは、若君とり給ひ
て、はゝうへにまいらせ給ふ。^(ママ)「いかに。いつくにいらせ給ふそ。」
と仰有ければ、^{二十六ウ}

「にしのひさしに。」と申給へは、「若君三さいといはん時よそな
から。」とちきり給ひしことは、おほしめし出て、御心もこゝろ
ならず。「いつち。」とて、いそきたち出させ給ふ。「いかに、『今
一たひ。』と、ちきりしことは、わすれ給へるか。この若君をのこ
しをきて、上下はんみんのくちに、『いかなる人』『たれやの人の
子にてあるらん。』とあつかひ申ことの心なさよ。いかにかしこき
御かとゝ申とも、まるか子をひんなき事にて侍るなり。日のした
にすましては、かなふまし。されは、たゝいまくしてのほるへし。
いかなけき給はん。いとをしさかきりなく」^{二十七ウ}

侍れとも、いつをかきりにあらはこそ、これになけきをわするゝ
くすりあり。まいる。わすれ給へ。」とて、うつくしくひかりかゝ
やくつほに、くすりを一はい入たるをとりいたさせ給ひて、まい
らせ給ふ。ひめ君、此よしきこしめし、「こはいかに。君にすてら
れまいらせ、したもへのふしのたかねの夕けふり、我身のうへと、
かなしくのへになくむしの音も、我身をとふらふたくひそと、と
もになみたをなかにして、心にまかせぬうき身なれば、かひなき
のちなからへて、二たひうつゝに御めにかゝるはつかしきよ。す
てられまいらせて、心うかりしおもひをも、此若君に」^{二十七ウ}

なくきみて、いまゝてなからへさふらふそや。若君をくしておは
しまさは、まつ身つかをかいして、のちはともかくも御はから
い。」との給ひて、なきかなしみ給ふを、大臣殿も北の御かたも、
此よしをきこしめして、いそきはしり出給ひ、若君をいたきとり
給ひ、「いかに仰さふらふとも、此若君をはやり奉るまし。我等か
いのちをめされて、そのゝちとりておほしませ。若君にはなれた
てまつりて、命なから侍るへしとおほえす。」とて、いたきとめ
て、出し給はす。此よしを御らんして、「たはかりてのほらん。」
とおほしめし、「さらは、此たひはをき奉るへし。」^{二十八ウ}

心やすくおもひ給へ。」と仰られければ、みなゝよろこひ給ふ事
かきりなし。「さらは若君に申をきたき事あり。こしのきわへいら
せ給へ。」とありしかは、大臣殿よろこひ給ひて、「さらは御まい
り候て、きゝ給へ。」とて、御手をはなち給へは、若君は、二さう
をえたる御人なれば、これをかきりとおほしめし、たちかへり御
覽して、むつからせ給へは、「とくゝわたらせ給へ。」との給へ
は、若君、御め、をしのこひて、まいり給へは、玉の御こしのう
ちより、御手をさしのへて、「若君これへ。」とて、いたきとり奉
らせ給へは、御はゝ姫君も御こしの^{二十八ウ}
きはまて出たまふ。「さて、いかに。」との給ひて、姫君の御手を
とりて、

夢とのみおもひてきりのすき枕^(※きりのすき枕)

けふあらはるゝすかたとも見よ

とて、うつくしきあまの羽衣とり出させ給ひて、若君にきせ奉せ
給ひて、御めのとのかたへ、「御かたみに見よ。」とて、をしいた
させ給ふ。おとと、北の御かた、此よしを御らんとして、ひめ君、
へんのつばね、こゑゝになき給ふ。御こしひかりめいゝとし

て、いきやうくんとして、むらさきの雲まいさかり、天より花ふり、ゆらめき」^{二十九オ}

わたり、天をさしてそあからせ給ふ。大臣殿は、御こゑをあけて、「いかなにおに・きしんなりとも、しゆしやうをたすけ、此たひはかりは。」と、こゑもおしますなけき給へとも、いなつまのひかりのことく、ひさしのうへにひらめきて、なこりなくそあかり給ふ。みなく、なけきかなしみ給ふこゑ、天にもひくはかりなり。物によくくたとふれば、みやうりやうのある月、しやかねはんのなけき給ひしには、はるかにましてそきこえける。大臣殿、北のかた、姫君は、庭のいさこにたおれふし、「今一めなりとも、若君を見せたはせ給へ」とよ。それかなふましくは、^{二十九ウ}

身つからは命をめし給へ。」と、なきかなしみ給ふ事かきりなし。姫君は、御なみたのひまよりも、「あな心うや。此若君、つねは、『はうへ』とて、うちあまへ、なつかしけにて、たちよらせ給へとも、よその人めのはつかしくて、さらぬやうにてすこし侍りしに、いかにつらくおほしめしけん、くやしきよ。」とて、五たいをちになけふし、まろひてそなけき給ふ。心なきも、心あるも、これをあわれみたまつる。大臣殿御あにくわんはく殿は、さして御用の事有て、入せ給ひけるか、此よしを御らんして、あわれにおほしめして、内里へまいり給ふ天上にて^{三十オ}

御物かたりのつみてに申させ給ふやう、「世にはふしきなる事も侍るそや。かやうの事もためしある事かや。けふおとくにても、大臣の乙姫をはしめて見侍るそや。うつくしきなんととも、なへての事をこそ申候へ。ことの葉におよはず。すてに雨若御子のおよひ給ひけるか、「三さいになる若君を、たう今天へ取てのほらせ給ふ。」とて、大臣、北のかたは、ひめ君、庭のしらすにたをれふ

し、なけき侍りつるふしきさよ。されは、かの若君たう人とは見え給はず、うつくしく侍りつるこそ、ことはりなれ。かたしけなくもほとけの御子^{三十ウ}

をまうけたまへるありかたさよ。」とかたり給ふを、御かとおくときこしめして、「あなふしきや。されはこそ、しさいあり、あねをまるにえさせつることよ。」とおほしめして、「おと姫たうならぬなんときこえしは、まことにてありけるよ。まるか心さしせつなれば、たう人なりともくるしかるまし。ましてや天の雨若御子のかよひ給ふなれば、さこそうつくしくおはすらん。」とおほしめして、やかてせんしをくたされける。「まことや、内大臣のおとひめ、そのかたちすぐれたるによりて、天の雨若御子のかよひ給ひけるとかや。すこしも^{三十一オ}

くるしからず。」とて、「きさきにそなへ奉るへし。」とせんしをくたし給ふ。大臣殿、「こはいかに。若君にわかれ奉て、いまよにあらんとおもふにこそ、せんしもおそろしくおもひ侍らん。そのうへ一かたならぬなけきある人を、『たういまきさきにたてん。』とこそ申しけれ。およそあねをまいらせて、おさまらぬこそ、めんほくなく、くちおしく侍るに、『いもうとまいらせたり。』といわれん事も見くるし。」とて、御返事をさへ申給はねは、御かときこしめし、ことはりとおほしめして、「さらは、まるかくらゐをすへりて、内大臣のさとへゆきて、心のまゝにとりて^{三十一ウ}

みん。」と仰られ、帝何のさへもましまさぬ御身にて、御年廿七と申に御くらゐをすへり給ひて、御おとくの春宮に御代をゆすり給ふ。すてに大臣殿へきやうかうならせ給へは、姫君は、「此みかとゆへにこそ夢人にもすてられ奉いとをし。」と、「若君にもはなれ申事、ひとへに御かとうき事」とおほしめし、しつませ給ひし

御事なれば、「我身はちゝにくたかれ申とも、したかひ奉るまし。」と仰有ければ、御かと、ほいなくおほしめし、くわんかうなり給ひけるとかや。さる程に、今の春宮と申奉るは、御としは升三にそならせ給ふ。御みめかたち、御かとよりも

三十二才

はるかにうつくしく、御心はへも一しほめてたくわたらせ給ふ。せんわうは御おもひにならせ給ひて、ひたそら御なけきふかゝりければ、つやゝく御も御らんし入させ給はす。よるのおとゝにのみこもりいらせ給ふそ、かたしけなき。さる程に、春宮は、人しれす此姫君の御ことおほしめしけれとも、さきの御かとおおそれさせ給ひて、御いろにも出し給はす。したもへのけふりに、御むねをのみこかし給ひしか、いまのしこくを待えさせ給ひて、御しうとの中將殿して、きさきにたてまつるへきよし、せんし

三十二才

あり。中ゝきゝ入給ふ御事もなく、おもひにはうしたまふ。せんしはたひゝありければ、すてに八月の事なれば、「御なけきはわたくしこと。わうとのすまいにてありながら、たひゝの御かとのせんしをかへし申さんこと、そのおそれもいかならん。又、雨若御子の文にも、『春宮にちきりふかくて、此世の人とはむまれ給ふ。』とあそはし侍れば、かくておはすへき事ならず。はやくまいらせ給へ。」と、御あに中將さいしやう、とりゝにいさめ給へは、大臣殿も、『ことばり。』とおほしめし、御うけおそ申させ給ふ。御かとはかきりなく

三十三才

御よろこひあり、「やかて、けふあすにも。」と、おほしめしけれとも、ふるきみかとおほしめさん御こともさすかにて、十月十三日にそさため給ひける。ひめ君は、此程の御おもひに、みたれかみをさへとりあげ給ふ御こともなく、うちやつれ給ふ御すかた、

いとゝうつくしく、あたりもひかりかゝやくはかりにそおはします。此たひは、大臣殿も、北の御かたも、御心をつくして、御したてとも、中ゝ申はかりなし。ひめ君は、いまさらおほしめしたすことおほくて、御なみたはひまもなし。すてにその日にも成しかは、「わさとひるなるへし。」と、せんし

三十三才

ありければ、せんしのまゝ、ひる午のこくにそ、御まいりあり。うしかい、みすいしん、「我もく。」と身をかさり、御車二十五れうやりつゝけ、くきやう・天上人のありさま、たとへんかたもなかりけり。やうゝ内里へまいり給ふ。人も、「御けしき、われもく。」と、おひたゝしくそきこえ奉る。「わさときちやうもあるへからす。」とのせんしにて、なんてんのひろひさしにて、御かと御らんしとをさせ給ふ。八十四人の女はうたち、けふの御しやうそくの衣までも、心をつくして、したて給へは、申はかりもなかりけり。御かと

三十四才

は、「わさとさきの御かとのやうに、たはかられやせん。」とおほしめして、ひろひさしより、御覽しとをされけり。比は十月十三日の事なれば、ひめ君の御しやうそくには、もみちかさねの十五に、ことにいろこくてりたるに、うす物のかいねりに、なてしこにまつをあをく花やかにかさねて、りんたうのおり物に、ちしほの御はかまふみくゝみて、十ゑの御あふき、さしかさし給つるに、すこしはつれ給ふ御かほつき、さしあゆみ給ふ御すかた、たとへんかたそなかりける。「天の雨若御子のまよひ給ふもけにことばりかな。」と、

三十四才

おほしめし、「天人などのあまくだり給ふか。」と、御心もあくかれ、たとへんかたなくおほしめす。姫君は、たゝいにしへの事おほしめし出て、御むねのみあくかれて、御なみたそもれ出給ふ。

御かとは、いつしか御そはにさしよらせ給ひて、たはふれ給ふにも、夢人のこと、いまのやうに、御むねうちさはき給ひける。御かとは御らんして、「何とて物を仰られぬぞ。」とて、なをあかぬ御心ちにて、「きみの御にほひ、我身にみちるるそや。」とて、「此年月、人しれすおもひそめにしことの葉にも、まつはおいけるよ。」と、えんなうの御ふすまの下には、^{三十五才}

ひよくの御かたらひあさからす。たかひの御ちきり、いにしへのけんそうくわうてい・やうきひと、「天にあらはひよくの鳥、地にあらはれんりのえたとならん。」と、たかひにちきり給ひしは、物のかすならす、あけゆく空おそなけき給ふ。いまは人めをもつゝませ給はす、あさまつりことをもおこたり給ふ。たゝこもりいませ給ひて、あからさまにも、きさきのそはをたちさらせ給はす。ふるき御かとは、此よしきこしめして、いとゝ御おもひそふかりける。「かなはぬちきりをいひ出しつる、はつかしけれ。」とおほしめして、^{三十五才}

「御くわん有。」とて、さかへ御まいりありて、やまよりさすをめしくたし、しのひて御くしおろさせ給ひて後は、御たうにこもらせ給ひて、人にもまみえ給はす。く御も御とゝめありて、夜るひるほとけのまへにて、御きやうをそあそはしける。宮も、なくさめ奉とも御出もなし。人々の中に、こん衛の大しやう殿にはかり時ゝ御物こしはかりうけ給ける。「さても、まるかちきりのほとはしらぬとも、たれゆへかくはなりぬるそや。おとゝかうらめしさよ。」とおほしめして、うすやうに、かくそあそはしける。^{三十六才}

うらめしやなとおとつれのなかるらん
こはなに事になれる我身ぞ

「これを、内大臣まいりたらん時、とらせよ。」とて、あんせちとのにたひにける。いそきもちて、まいり給へり。おとゝひらき見給へは、かたしけなく、御いとおしくて、まいられけれども、つゐに御たいめんもなし。御かとよりも文をたてまつらせ給ひて、きやうかうならせ給へとも、つゐに見えさせ給はす。ちからなく、くわんきよならせ給ふ。かくて、三日と申ひつしの時はかりに、^{三十六才}いつよりも御こゑたかくうちあけ、

御きやうをそあそはしける。人々みな、かんるいをなかされける。ことにうちあけさせ給ふ。「二しや、ふとくさほんでんわう、二しや、たいしやく、三しや、まわう、四しや、りんしやうわう、五しや、しゆつしんうむかによしん。」とあそはしける御こゑ、したひにとをくならせ給ふ。いきやうくんして、御たうのうちにみちゝて雲たちまちたなひき、そらよりおんかくのこゑきこえ、花ふりくたり、廿五のぼさつ、やうかうありて、かうのけふりともろともに、てんへそあかり給ひける。ありかたき御ありさま、^{三十七才}申も中ゝおろかなり。

御かと、此よしそうし申せは、りやうかんより御なみたをなかし給ひて、御とふらい中ゝかすをつくし給ふ。さても、きさきは、やかて、御くわいにんありて、若君御たんしやうありぬ。天下のよろこひ、かきりなし。此はゝに、若君三人、ひめみや二人、出きさせ給ふ。一の宮は、御くらいにつき給ふ。二のみやは、春宮にすへたてまつらせ給ふ。三の宮は、兵部卿の宮とそ申ける。ひめみや一人は、かものさいるんにすわり給ふ。二の宮は、いせのさいくうに立給ふ。御はんしやうかきりなし。かくて、みかとは、御心にのこる事なくまします。^{三十七才}

あかしくらさせ給ふ程に、御年四十四才と申に、かりそめのやう

に御なふつかせ給ひ、ほとなくほうきよならせ給ふ。女この御なけき申はかりなし。御とし四十二さいと申せとも、御かたちうつくしくくれ給へるほとに、井二三はかりにそみえさせ給ふ。星まつこさ、にしきのきちやうの内も、いつしかさひしくおほしめし、御なけきのいろ、ふかくまし／＼て、おきいて給ふ御こともまします。七日／＼の御とふらひ、四十九日、百十日の御とふらひ、ためしすくなふそきこえし。程なく一めぐりにならせ給ひて、いつよりも御心をすまし給ひて、きさきは、
三十八オ

なんてんのさくら、月のおほろにして、よに心ほそき折ふし、比は三月十二日の事なるに、御心をすまし給ひて、なかめおはしましければ、月のひかりくまなくてらすと御らんしあけ給へは、なんてんのさくらのうへに、又いにしへの玉の御こしふりくたり、「いかに。今は、おほしめしわすれ給ふか。むかし夢にかよひたてまつりし雨若御子まいり侍り。ありし若君は、つねに、『は、うへ』とたつねたてまつるなり。春宮のちきりのこる所なし。はや／＼いらせ給へ。さりながら、その御すかたにてはかなふましきなり。
三十八ウ

しやうをかへて、とく／＼のほらせ給ふへし。」とて、やかて天にあかり給ふ。御目くらふならせ給ひて、御身にしむとおほしめし、やかてうちふし給ふ。日にそへて、時にまさりて、おもらせ給ふ程に、山／＼寺／＼の御いのりおひた／＼し。きさき、御いきのしたよりの給ふやう、「御いのりもし給ふへからす。た／＼五しやうをよく／＼とふらひ給へ。」と仰有。その／＼ちは御いのりをし給はす。あみたのさんそむをかけたてまつり、一すしに後世をねかひ給ふ。さる程に、三日と申さるのさかりに、さなからえみをふくみ給へるやうにて、
三十九オ

わうしやうのそくわいをとけ給ふ。みや・わうしをはしめたてまつり、ち／＼大臣殿、は／＼北の御かた、その外かすの女はうたち、なけきかなしみ給ふこと、たとへは、しやかにうめつの御時、五十二るいまであつまりて、なけきかなしみたてまつりしも、いかでこれにはまさるへき。此きさきは、あまりに人に思ひをかうふり給ふほとに、一たんしやたうにおち給ふへし。いまたみかとの御そんしやうの時、殿上のあそひのありし時、御かとあまりに御てうあひの御／＼ろ、もたせ給へる御しやくにて、にしきのきちやうを、
三十九ウ

うちあけさせ給ひて、「かやうにありかたき御よそほひは、又もや世にあるへき。」との給ひて、さつとうちをけさせ給ひし時、殿上につらなるくきやう井五人なり。一め見奉て、その御あそひよりかへらせ給ひて、井三人は、たちまちおよはぬこひにふししつみ、やう／＼三日ながらへて、おもひにまよひ、ゆ水をたへは、あしたの露ときえ給ふ。その／＼ち、花のもと、月のまへにて、みたてまつりし人／＼は、かなはぬおもひに、身をこかし、清水・はつせにまいりては、「命をとりて給ひ我。」と、おなし心にいのりつゝ、
四十オ

あるいはふち川に
身をしつめ、山林にとちこもり、身をいたつらになし給ふ人／＼かすをしらす。されは、みめかたちゆふに／＼つくしき人は、すなはち、ほとけのけしんなり。かのひめ君ゆへに、あまたのくきやう、殿上人、うき世をいとひ、たうしんおこし、やまはやしにこもり、一すしに後世ほたひをねかひしも、ひとへにおよはぬこひゆへなり。ち／＼は／＼の御ことは申におよはす、めてたくさかへ、はんしやうし給ひて、百井年の御よはひをたもたせ給ひて、つるには、大わうしやうのそくわいをとけ給ふ。むかしより
四十ウ

今にいたるまで、「女ふうふのならひ、たかきもいやしきによらず、なさけのみちは、はかなききりおほし。」といへとも、天のほし天若御子あまくたり給ひて、にんけんにはたをふれ、あまつさへ、かたみをのこし給ふこと、せんたいみもん、ためしすくなきこととそうけ給はる。うき世にむまれとても、人となるほとんらは、すかたありさまうつくしく、心はへなへてならぬほとに、ありたき物なり。かたちは心にまかせぬ事、心をみなくたしなみ給ふへき事也。

（白紙）

四十一ウ

四十五オ

解題

中世小説「あめわかみこ」の物語には、七夕系、天稚系の両系統あるが、ここに翻刻した、東北大学附属図書館狩野文庫蔵『あめわかみこ』は、天稚系の写本の一つである。

まず、本書の書誌について述べる。

本書は、夏目漱石の友人にして、書籍蒐集家であり、一高学長、京都帝大文科大学長、東北大学総長等を歴任された狩野享吉氏が蒐集された膨大な蔵書（約十萬冊）を、東北大学が四回に向けて購入もしくは受贈したが、本書は、その四回目（昭和18年3月31日）として、狩野氏没後一括購入された約二萬冊の図書の中の一冊である。¹⁾

装訂は、美濃紙袋綴の大型写本一冊。縦二十七・六糎、横二十五糎。表紙は二葉ある。外表紙は、東北帝大が付加したものらしく、こげ茶の厚紙に、卅字崩し繋ぎの模様が描かれ、中央上下に、「東北帝國大學圖書」と空押ししてある。題簽は、左肩にあり、

縦十八・〇糎、横三・五糎の白の短冊に、重郭付で、「あめわかみこ 全」と墨書されている。右肩隅には、「狩・第4門・28469・1冊」と記された図書番号がある。見返しは、無地の鳥の子紙。内表紙は、厚い灰地の奉書紙で、これが原装と思われる。題簽はなく、左寄り天地一杯に、「あめわかみこ 全」と、内表紙に直に墨書されている。内表紙の見返しも、厚地の灰の奉書紙で、中央上部に、「東北帝國大學圖書印」の朱印がある。丁数は、全四十一丁で、遊び紙はない。本文は、縦約二十一糎、横約十五糎、行数は十行で、一行は二十〇二十六字程度である。挿絵、奥書、尾題等はない。初丁表に、「柳原庫」「東北帝國大學圖書」「狩野博士集書」の印記がある。「柳原庫」は、日野家（本姓藤原）より分家し、柳原殿に居を構え、代々文筆を以て朝廷に仕え、維新後、華族に列し伯爵を授かり、大正天皇御生母柳原愛子を生み出した名家柳原家の文庫の名称である。柳原家の永い歴史において、本書が誰の蒐集によるものかは推測の域を出ない。『国書総目録』に拠れば、三代忠光に始まり、八代資定、九代淳光、十三代資行、十四代資廉、十七代資堯以下、光綱、紀光、均光、隆光、光愛、前光と続いて何等かの文章を残しており、中でも、資定、光綱、紀光、均光、隆光、光愛は、文学的な文章を多数残しているから彼らのうちのいずれかの所有であった可能性はあろう。²⁾

本書には、朱の勘物、傍点等が若干見られるが、本文の書体とは異なるので、狩野享吉氏か、柳原家のいずれかの人物によって加えられたものかも知れない。

本書の書写年は不明であるが、虫喰い等ほとんどなく、保存状態良好で、装訂の面から行っても、江戸時代を遡ることは、まずあり得ないだろうと推測される。

次に、本書『あめわかみこ』の内容と本文について述べる。
天稚系の諸本としては、現在、次のものが知られている。

版本

- (1) 大洲市立図書館蔵『あめ若さうし』 刊年不明
- (2) 京都大学文学部蔵『あめわか物語』 刊年不明
- (3) 宝永・正徳頃刊本『あめ若みこ忍び物語』 古梓堂文庫蔵他

(4) 明暦元年版『たなばた』 赤木文庫蔵他

写本

- (5) 寛文・延宝頃刊本『たなはた』 国立国会図書館蔵他
- (1) 東北大学附属図書館蔵『あめわかみこ』 本書
- (2) 国立国会図書館蔵『あめ若物かたり』 一冊 天保十年
- (3) 高松宮御所蔵『七夕の草紙』 一冊 書写年不明
- (4) 慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』 大型奈良絵本 三冊 書写年不明
- (5) 横山重氏蔵『雨若御子の物かたり』 一冊 寛永二十年
- (6) 慶応義塾図書館蔵『たなばたの本地』 一冊 寛永七年
- (7) 福岡女子大学附属図書館蔵『天稚彦物語』 奈良絵巻 二巻 書写年不明

(以上『国書総目録』、『宝町時代物語現存本簡明目録』等に基づくが、一部補訂した。なお、版本(1)(2)(5)、写本(2)(3)(4)は、新居浜工業高等専門学校紀要(人文科学編)に、翻刻した本文に拠る。)上記諸本との比較において、東北大学附属図書館蔵本の特徴を考察したい。

中世小説は、一般的に仮名遣の乱れが大きいという特徴を持つが、本書の仮名遣は、「ゆへ」「まいり」「いととし」等、若干の例

外はあるが、ほとんど歴史的仮名遣に一致している点が目ざれる。これによつて、本書の書写年代や、書写者の階層等の推定もある程度可能かも知れぬが、まだ確言できる段階ではない。

本書には、誤脱が若干見られる。例えば、本書で、

あね御せんは十七八、もうと姫君は十五と申八月十五夜(一ウ)

とある部分、他本では、

あねきみ十七、いもうとの姫君は十五と申ける八月十五夜

(高松宮御所蔵『七夕の草紙』)

の如く作る(国会図書館蔵『あめ若物かたり』、同『たなはた』、明暦元年版『たなはた』、福岡女子大学附属図書館蔵『天稚彦物語』も同様)。これは明らかに、本書の「十七八」の「八」が、本来、「いもうと」の「い」という平仮名であつたものが、漢数字の「八」と誤解された結果の本文であると言えよう。

同様に、妹姫君が天稚御子に出逢う時の歌は、本書では、

いにしへのちきりはしらし此世にて

かゝるうきめのうちゑしらしな (三才)

と作る。しかし、下の句の意味が不分明である。この部分、慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』には、

いにしへのちきりはしらすこのよにて

かゝるうきことのゆくゑあらしを

とあつて、本書の「うちゑ」は「ゆくゑ」の誤りと指摘される。

また、文意から考えて不自然と思われる点もいくつか見られる。内大臣の公達の紹介の場面を、本書では次の如く述べる。

ちやくしはとうの中將、二はんは四位の少將、三はんは三位の中將とそ申ける。

その場面を、国会図書館蔵『あめ若物かたり』では、かく作る。
御ちやくしをはとう中將、つきを是三みの中將、三をはし
ゐのせうしやう。

位階からすれば、『あめ若物かたり』の本文が正しいのであつて、本書は、何らかの手違いで、順序を取り違えたのであろう。

一方、本書が、他本の誤りを指摘できるところも若干ある。例えば、慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』では、妹姫君に天人が天降ったことを、関白が耳にする場面は、次の如くである。

おとゝの御めに、くわんはくとのゝおとゝに、おほせあはすへき事ましゝて、

これでは、意味不明であるが、本書では、該当場面を此く作る。

大臣殿御あにくわんはく殿は、さして御用の事ありて、（二十九オ）

本書に拠って、『雨わかみこ』の「御めに」は、「御あに」の誤りと判断される。

次に、本書の特徴としては、独自の本文が多数あることが挙げられよう。

例えば、妹姫君が湯殿で倒れる場面で、父大臣の様子を、本書は次のように作る。

おとゝも、あまりのかなしさに、きちやうのかけにたゝせ給ひて、かなしみ給ふことかきりなし。（十オ）

父大臣が、最初から、姫君の側に来て、姫君の様子を気づかうのは、本書のみである。この場面のみでなく、全体を通して、優しく涙もろい父親像が描かれているのが、本書の特徴である。これを例えば、大洲市立図書館蔵『あめ若さうし』に描かれた、残忍な父親像と比べると、対照的である。『あめ若さうし』では、次

の如く描いているからである。

大じんあまりにはらをたて、すいくはのせめにてとひ給へとも、もとよりしらぬ事なれば、かくとことふる人ぞなき。大じんあまりのむねんさに、こしのかたなをするりと抜き、ひめ君を殺さんとし給へは、

両者を較べる時、本書の気弱で優しい父親の姿は、際立っている。よ。

その他の場面で、本書が他本と異なる独自の本文を持つのは、次の諸条である。

①妹姫君が、湯殿で倒れ、回復した後、母君に真実を述べる条（十ウゝ十一オ）。

②妹姫君の乳母が心で、若いお付きの者しかない条（十二ウ）。

③妹姫君が、大臣宅に戻った後、神無月廿日頃、四方の紅葉に嵐が吹き荒れるのを見聞し、「ことの葉を……」の歌を詠み、あめわかみこに逢えぬ悲しみを嘆く条（二十四オ）。

④若君が、露を集めて、行水する条（二十六オ）。

⑤あめわかみこが、若君を連れ去る際、天の羽衣を着せる条（二十八オ）。

⑥帝が降り居になつてから、自ら大臣宅へ赴き、妹姫君を得ようとする条（三十ウゝ三十一オ）。

本書は、全体としては、慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』に、内容・本文とも近いが、右の如き異同がある。特に③の条は、内容的には、古そうな印象があり、古態を伝えているものかどうか検討するに値しよう。また、④では、七夕の民間行事の影響が色濃く現われている点が注目される。さらに、⑤では、「天の羽衣」

という表現に、『竹取物語』や『小夜衣』、羽衣伝説等との関連が考慮されるべきであろうが、今回は、今後の研究課題として、指摘するにとどめておきたい。

右に加うるに、本書の大きな特徴は、『あめわかみこ』天稚系の古型と目されている散逸物語『夢ゆゑ物思ふ』（『風葉和歌集』所載）の残存歌と一致する歌を見出せることである。

あめわかみこが、姫君に分かれを告げたことに対し、姫君が応えた歌は次の通りである。

これやさはかきりなるらんうは玉のよなくみえし夢のか
よひち （『風葉集』恋二、877 中宮（姫君）の返歌）

これやこのかきりなるらんむは玉のよるくかよふ夢のか
よひち （本書、七ウ 姫君の返歌）

これやさはかきりなるらんむはたまのよなくみゆるゆめ
のかよひち （慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』 姫君の返歌）

これやこのかきりならまうはたまのよるく見えしゆめ
のかよひち （福岡女子大学附属図書館蔵『天稚彦物語』 あめわかみこの返歌）

本書は、右の三本中、『風葉集』所載歌と、本文的には最も隔っているとも見られるが、詠み手は、『風葉集』所載歌に一致し、歌と詠み手の整合性において、福岡女子大学附属図書館蔵本に勝る。また、姫君の帝に対する返歌は、次のようである。

数ならぬ身には雲るの藤の花こゝろの松もいかゝしるへき
（『風葉集』雑一、1181 中宮（姫君）の歌）

かすならぬ身にはおもひのふし（^{マユ}）の花まつふくうらにかひや
なからん （本書 五オ 姫君の歌）

かすならぬ身には雲井のふちの花こゝろのまつもかひやな
からん （慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』 姫君の歌）
かすならぬ身にもくもるのふちの花こゝろのまつもいかゝ
しらまし （国立国会図書館蔵『あめ若物かたり』 姫君の歌）

この歌では、三本とも、歌と詠み手に齟齬は見られないが、本文的には、本書の歌が、最も変形している。また、三本を通してみると、『風葉集』所載歌からの本文の推移が辿れるような本文となっている。

右の如く、本文自体は後生的な面も見られるが、天稚系の古型『夢ゆゑ物思ふ』の残存歌と一致する歌を二首見出せるのは、他に、慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』があるのみなので、本書の存在意義は大きい。

なお、嘗て、慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』に、中世的な音楽神天稚御子のモチーフが見出されることを指摘した⁽⁴⁾。それは、あめわかみこが、姫君の許へ天降った理由を、姫君の琴の演奏の妙音に求めている点にあった。ところが、本書でも、

あまりにきんの音おもしろく侍りて、聞すてかたかくて参りより、（三ウ）

きんの音あまりにおもしろく侍りて、あくかれ出て、何となくちかつかたてまつり、（六オ）

と二ヶ所に亘って、姫君の琴の妙音に天降った天稚御子の音楽神的性格が見出されるのである。

平安・鎌倉的な音楽神天稚御子のモチーフを受け継いだ本書の本文は、注目に値しよう。

以上、多少の誤脱はあるが、独自の本文を多数有し、『夢ゆゑ物思

東北大学附属図書館蔵『あめわかみこ』の翻刻及び解題（勝俣）

ふ』との一致の度合も高く、中世的音楽神天稚御子像を遺存している由緒正しきにおいて、本書は、慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』より若干本文は劣ると思われるものの、諸本の校合上大きな意義を持つ写本と言えよう。

注

- (1) 『東北大学附属図書館図書学研究报告』（1-4、昭和四三―四六年）中、『狩野文庫』成立史の諸前提」（安藤重雄氏）に拠る。
- (2) 「既刊蔵書印影索引稿（人名篇）」（国文学研究資料館文献資料部『調査研究报告』第四号（一九八三）所収）等に拠る。
- (3) 「既刊蔵書印影索引稿（印文篇）」（国文学研究資料館文献資料部『調査研究报告』第一号（一九八〇）所収）では、「柳原庫」を「柳原紀光」の蔵書印としているが、注（2）で訂正したらしい。もし、柳原紀光（一七四八―一八〇〇）のものであれば、十八世紀後半に収集されたものと言えよう。
- (4) 拙稿「中世小説『あめわかみこ』の本文に関する一考察——慶応大学蔵『雨わかみこ』について——」（静岡大学人文学部『国文談話会報』第二十六号、昭和五十五年）並びに、「慶応義塾図書館蔵『雨わかみこ』の翻刻及び解題」（新居浜工業高等専門学校紀要（人文科学編）第十九巻、昭和五十八年）

（付記。東北大学附属図書館には、貴重な御蔵書の翻刻を御許可下さいましたことに対し、衷心の謝意を呈します。）

（昭和63年10月31日受理）